

## ジャムズネット東京メンバーインタビュー 第11回

聞き手：池田みどり

“医師の薦める医師”として人気の高い乳腺外科医、土井卓子先生。ピンクリボンキャンペーンの広告塔になっているタレント・山田邦子さんを最初に診察したことで知られ、各種メディアや講演会などでも大いに活動なさっています。土井先生がセンター長を務める『かまくら乳がん甲状腺センター』では、患者へのサポートを積極的に取り組むチーム医療を推し進めています。患者と医療関係者とのコミュニケーションの方法について、どのように対応されているかを中心にお話を聞きました。

### ■土井卓子さん



略歴：湘南記念病院、かまくら・乳がん甲状腺センター長として、医師、看護師だけでなく、薬剤師、体験者コーディネーターやリンパ浮腫ケアスタッフを組み込んだ乳がん治療チームの組織、また形成外科と連携した乳房再建などの総合的な乳腺治療を目指す。

略歴：横浜市立大学医学部卒業、横浜市立大学医学部付属病院で研修後、済生会横浜市南部病院、独立行政法人国立病院機構横浜医療センターなどを経て、2009年よりかまくら乳がん甲状腺センターを立ち上げる。

※ホームページかまくら乳がん甲状腺センター<http://syonan99.net/kbhcenter/>

### ・医師になられたきっかけを教えてください

赤ん坊の頃、一度死んだ経験があるんです。毛布に包まれて「ご遺体にお別れを」って言われまして・・・もうダメだと思っていたら、病院で生き返ったんです。そんな話を母から聞かされていました。どうせ死んじゃった命だったら、せめて人の役に立つ仕事をしたいなって、ずっと思っていたんです。小児科にはずっと入院していたこともあり、お世話になっていましたので、高校の頃には医師になりたいと思うようになりました。医大で勉強をするうちに、処置ができる医師になりたいと思い、外科を研修でまわりました。当時、男性の医師にとっては、まだまだ女性の医師が受け入れがたい空気がありました。「どうせすぐ辞

めるんだらう」などと、言われたこともあります。研修医のときに、ある現実に出会いました。乳がんの患者さんがたくさんいらしたのですが、女性らしい術後のケアをしてもらえないということです。肌着のことや、あるいは女性独特の気持ちの問題など、女性の医師にしかできないことがあり、患者さん達は女医を求めていることがわかりました。医局では2番目の女性の外科医となりました。

・その後、各地の病院での勤務を経て、2008年8月に、湘南記念病院内で『かまくら乳がん甲状腺センター』を設立されました。ここではチーム医療を実践されていますが、それについて教えてください

『かまくら乳がん甲状腺センター』では、医師のほかに、看護師、薬剤師、コーディネーター、ボランティア、そして受付員などのスタッフがいますが、彼ら自身が乳がんの体験者が多くいます。乳がんを体験したからこそできるケアをしたいという人たちが集まって、患者さんを支えようという意識のもとでやっています。受診者は一日に60人程度いらっしゃいます。今までですと、全部自分で説明をしなくてはならなかったのですが、チーム医療ではナースや薬剤師、コーディネーターさんたちが、それぞれの分野で患者さんとコミュニケーションを取り、作業を行っています。たとえば技師というのは今まで自分が診察の説明をするということがなかったのですが、うちでは検査を行うものについては、技師が直接患者さんを自分のところに呼んで、説明をしています。検査結果については医師が説明をしますが、傷あとなどについては技師が見るといったようなこともしています。薬剤師も。投与する薬について、患者さんに「あなたの場合はこの薬をこのくらいの量で…」などということとを、ちゃんと説明できるようにしています。

・コーディネーターについて教えてください

乳がんの術後に、自分の病気のことを生かして、何か仕事をしたいという方が、半年間の勉強を経て、乳がん患者のケアを専門にやってくれています。たとえばセカンドオピニオンを受けるにはどうしたらいいかなどのアドバイスや、病状についての相談、術後の食事やリハビリについてなど、日常的な患者さんのサポートを行います。

センターには、情報提供室というのがありますが、本やパンフレットの収集や、インターネットの設定なども含めて、情報が出しやすい体制を作ってくれています。また、各種セミナーやイベントの企画などもします。

たとえば白衣でない医師とお話をしてみるといいだろうということで、休みの日に患者さんと医師や看護師と一緒にハイキングにでかけたり、あるいは抗がん剤を使っている方のために、栄養士が食事の指導会をしたり、ウィッグ(かつら)の手入れをする勉強会をしたり、お化粧のコツを学ぶ会をしたりなど、多くの企画を立ててくれています。または、患者さ

んがみんなで毛糸の帽子を編みながら四方山話をしたりしますが、そのような患者さん同士の交流の中で、病気を乗り越えるための意欲を沸かせましょう、というような会も企画しています。

お手伝いをしてくださるボランティアさんは、コーディネーターと比べ、まだ知識も不十分ですので、患者さんにこういう風なサジェスチョンをしたらいなどの、ノウハウを教えたり、とりまとめなどもしてくれます。

現在3名の資格を持ったコーディネーターがおります。コーディネーターの研修は、キャンサーネットジャパンが主催します。半年にわたり専門の講師がそれぞれ講習を行い、それらを受講後、試験を受けることとなります。

※乳がん体験者コーディネーター養成講座について <http://cancernet.jp/nintei.html>

**・患者さん同士が集まってネットワークを広げたり、あるいは、自分達でイベントを企画することについてどのようにお考えですか？**

患者さんは、抗がん剤治療を受けてもつらいわけです。手術をやってもつらいし、迷うことがいっぱいあります。お互いが支えあうことでドロップアウトすることなく、きちんと治療を受けていけます。あるいは、どうすれば上手く乗り越えられるかというコツを伝えてもらうことで、心が楽になったという人も多くいらっしゃいます。重要なのは治療を快適に完全に受けていただくことだと思っています。

**・7月10日に開催される『BC ネットワーク 第2回乳がんシンポジウム@横浜』の共催団体として、土井先生が大きく関わっていただいています。このテーマである“患者力を高める”ということについてコメントをいただけますか？**

患者さんが受身になって、ただ治療をしてもらうという姿勢ですと、治療はうまくいきません。特に乳がんは選択しなければならないことが多いのですが、それは「自分の要望を入れた治療法を選びとって、いいんだよ」ということなのです。それを上手に選べるだけの力を持っていただきたいと思います。そのためには、情報を、医師とうまく共有して話し合うという姿勢がないといけません。医療者も情報を患者さんに提供してお互いにリスペクトしながら、“あなたにとって最善の治療法とは何か”を考えていくことです。そういう医療をするためには、患者さん自身が、自分の病状を見つめる力を持たなければならないでしょう。お互いが、コミュニケーションを上手にとるための力を養っていただきたいと思っています。

**・先生の病院ではカルテを共有なさっているということですが、詳しく教えていただけますか？**

私たちは乳腺手帳というノートを患者さんにさしあげています。そこには、私がカルテに書く内容と同じものを書きこんで差し上げています。自分の病状とそのデータがそのノートをごらんになれば、わかるようになっていきます。他の病院にかかるときにも、「こういう病状で、こういう薬をもらっています」ということを伝えやすいですし、あるいは私から聞いた説明が、他の医師にもわかるようになっていきます。患者さん自身も診察室で一回聞いただけでは忘れてしまいますが、これがあれば、家族への説明もしやすくなり、理解を得やすくなります。

**・医師と患者のコミュニケーションについて、医師が気をつけなければいけないこと、患者が気をつけなければならないことについてサジェスチョンをいただけますか？**

医師は相手にわかるように説明することが必要。義務的にただ言えればいいのではなく、相手が理解できる言葉で、理解できるように説明をする。また、相手がわかったかどうかを確認する、ということが大事です。患者さんはわからないことがあれば、医師に質問するとか、自分の希望を伝えるというコミュニケーションが必要です。そのような努力が必要です。ただしゃべっているだけで、伝わっていないということも多いと思います。

**・今後の活動について教えてください**

今後は、患者さんがお互いをもっと支えあえる力を持てるような外来を作っていきたいと思っています。同じがん患者さんの再発を見ることは、自分にとってもこわいけれど、それを見ないふりをするのではなく、お互いが支えあって、それを越えていける力が持てる・・・そのような外来が作りたいです。

**・ジャムズネット東京に期待すること**

日本から海外に行ったとき、治療や検査が途切れてしまう方々が多いという現実があります。逆に海外で手術を受けたり、治療をした方が、帰国したときに、継続的な治療ができない、あるいは中断してしまう方も多し。そういう方たちがうまく治療を継続できるためのひとつの力になっていただきたいですね。たとえばジャムズネット東京のメンバーである、“BC ネットワーク”はニューヨークで活動していますが、このシンポジウムでは、このような活動を日本でご紹介させていただきました。いろいろな医療活動について、お互いが共有できるということは、とてもよいことだと思います。